

『風死して 汗音もたてずにして 落つ』四角な関係 vol.2

くまがいマキ

【登場人物】

母（と母の少女時代）

\*会話の相手は、娘（みちこ）と、回想としての姉（なぎこ）

舞台上は畳敷きで、上手側には、ミシンがある。下手側は、障子で仕切られている。

台所、テレビのある部屋、玄関、座敷等が障子の奥にあるらしい。

風鈴の音。明るい音楽。（客入れ）

― たすき掛けに、姉さんかぶりの母、はたきを持って登場。はたきかけをする。ほうきで掃き掃除、雑巾で拭き掃除をする。きれいになって満足の様子。障子の向こうに去り、布団を叩く音がする。座布団を持って来る。綿を持って来る。布団の布と裁縫箱を持ってきたところで、テレビのつく音がする。甲子園からの生中継である。（開演）

父は、テレビに向かって何やら叫んでいるらしい。

母がミシンに糸を通して縫いかけると、チャイムが鳴る。母、下手に行く。

母 はーい。（再度チャイムの音）はーい。あら、お帰んなさい。お父さん。みちこが帰ってきたわよ。あら、あら、今日はどうしたの。ひろしさんは？ ああ、そう。お父さん。みちこですよ。お父さん。ちょっとテレビの音、小さくしてくださいよ。みちこ、あがんなさいよ。

― テレビの音、大きくなる。

母の声 お父さん。テレビ。みちこ、座敷の方、行ってなさい。今、冷たいもの、持っていくから。

ーテレビの音、また、大きくなる。

母の声 もう、お父さん。(テレビに駆け寄る) (テレビの音、少し小さくなる) 耳が悪くなりますよ。

ー母、台所に行ったらしい。

母の声 みちこ。麦茶でいいわよね。(麦茶を注いでいる音) 今日の麦茶はちょっと特別なよ。田中さんのおばあちゃんに教えていただいたんだけどね、お塩が入ってるの。夏は塩が足りなくなるから、いいんですって。あら、みちこ。どこ行っただの。みちこ。

ー母、舞台の方に来る。みちこは、ミシンの側にいるらしい。これ以降、みちこの対話は、みちこがいるつもりで行われる。

母 あら、こっち来てたの。座敷の方が涼しいのに。(みちこが何かを言う。以下、☆印がみちこの台詞の間) (母、それに頷く) 布団の打ち直ししてたのよ。(☆) いいわよ。せっかくあんたが帰って来たんだから。(☆) そうお？それならいいけど。ああ、座布団くらい、敷きなさいよ。

ー麦茶を置いて、座布団をすすめる。

母 もう、あとちょっとなのよ。これね、ミシンであそこ縫っちゃって。綿入れて。あっ、そうそう。山梨のおじさんからもらった果物があったのよ。何だかわからないけど。食べるでしょ。ちよっと待って。(☆) 何だかわからない

のよ。

―母、バタバタ去る。以下の台詞の間に、果物を探して、洗って、器に入れる音。

母の声 お父さん、山梨のおじさんからの、冷蔵庫に入れといてくれたんですよ。どこの段に入れました。お父さん。あら、やだ。のし紙付けたまんまじゃないですか。ぶどうだわ。みちこ。ぶどうだったわ。あんた、ぶどう好きよね。お父さんも食べますか。あら、お父さん、また、大福隠してる。お父さん、食器棚に隠したって駄目ですよ。すぐ見つかったちゃいますよ。これ、いつのかしら。ちょっと匂い、変だわ。これ、カビかしら。あぶって食べれば、また食べられるかもしれませんね。入れときますよ。

―風鈴の音やむ。母、ぶどうを持って入って来る。テレビの音、小さくなる。

母 巨峰よ。はい。(ぶどうを置く) (☆) だってお父さん、勝手に捨てると怒るんですよ。今日は晩ごはん、どうするの? (☆) ひろしさんのうち? (☆) 皆さんによろしくね。ちゃんとお土産持っていくのよ。(☆) よくないわよ。お母さんのしつげがなっていないと思われちゃうわ。困るわよ。麦茶飲まないの? (☆) (テレビの音消える) おいしいわよ。まだ飲んでないけど。おいしくない? (☆) そうお? (一口飲む) あら、おいしくないわ。(もう一口飲む) お母さんはいらないわよ。(☆) 昔、ぶどう食べ過ぎて、お腹こわしたから。それから苦手なのよ。あんた、食べなさい。

―ミシンで布団の端を縫い始める。縦の線を一直線に縫って。留めて。(＊上演時には、糸なしで、ミシンを動かしました)

母 (☆) こういう布団って、なかなか捨てられないのよ。これ、何かの着物だったのよね。誰のだったかしら。お姉

さんのかな。(☆) 死んだなぎこおばちゃん。お姉さん、結構若い時から地味なのばかり着てたから。

あつ、東京のなぎさちゃんから電報きてるわよ。式は来週なのにね。普通電報って、式場に送るわよね。なぎさちゃん、ちょっと抜けてるわよね。(☆) いとこのなぎさちゃんよ。(☆) 先週電話したのよ。(☆) 相変わらず忙しいみたい。(☆) そうね。よろしくって言ってたわよ。

あつ、そうだ。あんた、成田から新婚旅行、行くんでしょ。なぎさちゃんのとこ、寄ってきたら。(☆) 帰りならいいじゃない。(☆) 家族みたいなもんなんだから。あんた、可愛がってもらったでしょ。(☆) ちょっと、心配なのよ。高校でたら、一人で東京行っちゃって。しっかりしてるからいいんだけど、ちょっとね。特別な子だからね。

―途中まで縫った布を持って座る。

母 (☆) 特別な子って、ずっとなぎこおばちゃんの口グセだったんだって。こないだなぎさちゃんが言ってたわ。

「この子は特別な子だから。大丈夫だから」って、それで「ちょっとこの子、お願いね」って言って。(思い出して興奮する) そう、それで大変だったのよ。その後すぐ交通事故で、あそこの曲がり角で、あの車が多いとこ。やだ、今まで忘れてたわ。姉さん、「この子お願いね」って言って出て行ったんだわ。(☆) うん、見た人はいなかったって。

(☆) あつ、でもトラックの運転手は見たって言ってたのよ。お姉さん、目の前にいたって。

―しばらくの沈黙。

母 なんて、あんなこと言ったんだろう。

―しばらくの沈黙。綿を入れ始める。

母 (☆) やだ、事故よ。そんなわけないわよ。だって自殺する理由なんて何も無いもの。(☆) あそこ、信号がないし、見通しが悪いのよ。(間) やだ。(間) でも交通事故よ。間が悪かったのよ。だってなぎさちゃんの七五三の時

よ。三歳のあんたと一緒にお祝いして、なぎさちゃん、七つになったばっかりよ。そんな子供残して死ねないでしょ。あんな時に死ぬわけないわ。死ぬんだったら、高梨さんが死んだ時に後追い自殺してたわよ。

―(長めの☆) 母、あまり考えたくないが、娘に促されて、思い出しながら話す。手で布団を縫い始める。

母 高梨さんって、あんたは知らないだろうけど、なぎさおばちゃんのお父さん。(☆) お姉さん、高梨さんが死んだ後、うちに戻ってきて、こっちの名前、名乗ってたから。(☆) 高梨さん、交通事故で亡くなったのよ。(☆) やだ、あその角じゃないわよ。確か、違う場所だったわよ。そうよ。違う場所よ。確か、出張先のごとかよ。(☆) ちょっとないくらい仲のいい夫婦だったのよ。夫婦っていうか、恋人同士みただったわ。手つないでね。いつ見ても一緒にいて、この人達、もしかしたらトイレも一緒に入るんじゃないかしらって、思ったことあるのよ。

交通事故でね。高梨さん、植物人間になっちゃったのよ。頭を打ってね。他はみんな、きれいなままなのよ。私も見たけどね。寝てるとしか思えないのよ。でも起きないのよ。脳死って言うんでしょ。(手を叩く) ひげが生えるのよ。びっくりしたわ。(☆) お姉さん、やつれちゃってね。お姉さん、青白くって。(☆) ひと月、そんなのが続いて、でもお金もかかるでしょ。生き返る見込みはないし、みんなで説得したんだけど、殺すのは絶対嫌だって言って。お姉さんが殺すわけじゃないんだけど、ねえ、やっぱりね。(☆) なぎさちゃん、まだ生まれてないのよ。高梨さん、子供はいいって言ってたから。高梨さんといわれればいいって、作らなかつたから。

―綿の具合をみるために布団を広げて立つ。

母 なぎさちゃん、高梨さんが死んでからの子供なのよ。人工授精でできた子供だから。あつ、でも、高梨さんの子よ。(☆) 仕組み、わかる?(☆) うん。あんたには言ってなかったわよね。隠してたわけじゃないけどね。子供に言うことでもないでしょ。お姉さん、なぎさちゃん、産むこと決めて、それで高梨さんの生命維持装置止めることに同意したのよ。(☆) なぎさちゃん、高梨さんの大切な忘れ形見よ。置いて死ねるわけじゃないじゃない。

(縫い終わる)

(☆) 高梨さんの命日は、確か十二月よ。なぎこおばちゃんは、ひと月前なもの。同じ日じゃないわよ。

(☆) どっちって。そりゃ、生命維持装置止めた日でしょ。(☆) えっ！えっ！いやだ。(☆) えっ！同じ日？えーっ、覚えてないわよ。違う日でしょ。(☆) やめてよ。違うわよ。(☆) 自信ないけど。同じ日かもしれないけど、お姉さん、絶対自殺じゃないわよ。(☆) もう、この話やめましょう。お母さん、何だか鳥肌立ってきちゃった、(☆) そう、昔のことよ。(麦茶を飲む) おいしくないわね。

ー娘、立ち上がったらしい。CDを持っているらしい。

母 (☆) あっ、探してくれたの。ありがとう。うん、かけてちょうだいよ。お母さん、その機械使い方よくわかんなくって。

ー笠置シズ子のヴギウギが明るく流れる。(『ホームラン・ブギ』)

母 ああ、この曲、この曲。これ聞きたかったのよ。(しばらく聞く)

(☆) 東京行進曲？この頃の歌っていいわよね。じめじめしてないのよね。(☆) 歌えるわよ。(口ずさむ)

(☆) 最後の最初？なんだっけ。えーっと、(小声で歌い思い出そうとするがわからなくなる) ねえ、こっち、止めてよ。わかんないわよ。(CDが止まる。母、早口で歌い、思い出す)

あー、そうそう。これ。これ、不思議だったのよ。(☆) 小田急でどこまで行くんだろうって。(☆) なんだか、気になるのよ。気にならない？

(☆) だからこの後、知らないのよ。いっつも、ここで気になっちゃうから。(☆) 何か知らないわよ。屋根に出るものじゃない。(☆) やめてちょうだい。お母さん、怖い話苦手なんだから。(麦茶を飲む) おいしくないわね。

(☆) 駆け落ちなんて考えた事ないわよ。(☆) お父さんの前？いないわよ。(☆) しょうがないでしょ。いなかっただんだから。(☆) お父さん？初恋じゃないわよ。(☆) そうじゃなくて。(☆) 初恋ってないのよ。(☆) でも恋

と結婚は別のものよ。恋しなくても結婚出来るもの。(☆) お父さん？普通の男の人だと思ったわよ。(☆) 目があって、口があって、鼻が、(☆) あとね、びっくりしたのは、ほら、お父さん、割と童顔でしょ。それなのに髭の剃り残しがあったのよ。(☆) この辺。(と、あごを指す) 男の人だなんて思ったわ。(☆) そうよ。そんなもんでしょ。(☆) なぎこおばちゃんは特別よ。お母さんの若い頃に、人前で手つないでる人なんかいなかったもの。(☆) うーん。そんなこと思わなかったわよ。お姉さんは特別なもの。(☆) あっ、あのね、夏の暑い日にも、二人が手つないでたことがあるのよ。両方とも手に汗かいて、手の指と指が時々動いて、すき間をつくるのよ。なんか、ごそごそって。冬はしっかり組み合わさって、一つのものみたいになるのにな。なんだか、それがおかしかった。汗がね。二人の間にあるのよね。(麦茶を飲む) おいしいわね。

―時計が六つ鳴る。六時だ。娘は帰る。

母 皆さんによろしくね。お土産ちゃんと買いなさいよ。お母さんが出そうか。そうお。ああ、そこまで、送るわよ。お父さん。みちこが帰りますよ。(☆) よくないわよ。お父さん。

―母、去る。セミの声が聞こえる。

母の声 じゃあね。また、遊びにいらっしやい。

―母、ゆっくり戻ってくる。セミの声が大きくなる。

母 あら、ぶどう。食べなかったのね。(お盆を片付け、座布団を元に戻す) (ぶどうを眺め、一つ、房から取る。見つめながら、口に運ぶが口に触れる寸前でやめる) (落とす) (口は軽く開いたまま、少しポカんとする) (セミの声、瞬間的に落ちる) お姉ちゃんの声だ。(セミの音、大きくなる)

―母の少女時代。夏。入道雲、金魚、夜店、おぼけ、小川、花火、夕立。

セミが鳴いている。鳴き声が止まり、ふっと、飛び立つ。目で追う。後ろを向く。

―太鼓の音。姉の踊り。(母を演じる役者が「母く少女く姉」を兼ねても、他の役者が演じてもどちらでもいい) 運命のような恋。全てを受け入れて後ろを向く。

太鼓の音消える。

―少女、振り向く。不思議そうな表情。襖をそっと開ける。セミの声。

隙間から中を覗き込む。じーっと、ずーっと、覗いている。しばらくして襖を閉める。

少女 ずーっと、じーっとしていた。中には、お姉さんがいた。家のものが全部出払った夏休みの午後。早くに帰ってきてしまったあたしは、座敷の中から声が聞いた。小さな、低い声。男とも女ともわからない声。襖をそっと開けると、お姉さんがいた。広い座敷の真ん中に、仰向けに寝ていた。時々、小さな声が口から漏れる以外は本当に寝ているみたいだった。ただ一つ変だったのは、お姉さんの右手が、着物の裾を割って、足と足の間にあることだった。左手は、心臓を守るように左胸に置かれていた。不思議な声だった。ただ息を吐く音だったのかもしれない。しばらくして、お姉さんは、あ、と軽く声を出して、左の手で胸をぎゅーっと押さえた。

お姉さんじゃない女の人の声みたいだった。汗が流れて、あたしの左の脛と足の間が一本の管のようにつながって潤んだ。

少女 夕ご飯の後に、ぶどうが出た。お姉さんは右手でそれを摘むと、口にもっていった。口に含み、皮と種を出して、汁と果肉を飲み込んだ。あたしは急にお腹が痛くなった。家の人は食べ過ぎたのだと笑った。ぶどうは食べなかった。

―少女、ゆっくり布団を広げて、畳の上に敷く。

少女 「早く夏が終わらないかな」と、あたしが言うと、お姉さんは「私は夏が好きよ」と言った。「どうして」「夏は自分の中にもう一人別の人間がいるような気分になさせてくれるから」「別の人間なんかいないよ」「私の中にはいるのよ」「いないよ」「お姉ちゃんは特別なの」「特別ないいいな。」

―広げた布団を側に立って眺める。

少女 別の人間って、男の人のことだったのかな。子供の事だったのかな。

―うつ伏せに布団に横たわってみる。薄闇。

母 お姉ちゃん、好きだったな。

―テレビの音、フェイドイン。決勝戦が終わる。甲子園の夏が終わる。

母、ゆっくり起き上がり、電気をつける。

ぶどうを一つとる。ポンと口に放り込み、麦茶と一緒に飲み干す。

母 おいしくない。

―母、小声で歌（『わたしこの頃変なのよ』）を口ずさむ。

母 （父が呼んでいるらしい）はーい。

―また、歌う。ぶどうと麦茶をまとめる。

母 はーい。(退場)

ー暗転。

ー客出しの曲が流れる。舞台明かり、客電つく。

\*初演：1990.8.31～9.4

改訂版：1995.2.17～19